

聖書：ルカの福音書 17 章 1～4 節

説教：赦してやりなさい

現在、アメリカの西海岸に住んでおられ、定期的に日本に来られてミニストリーをされている上沼先生という方がいます。この先生は、男性集会を各地で開きながら、心の奥底にある父親との葛藤ということに目を留める働きをされています。権威主義的な父親、アルコール依存症の父親、暴力をふるう父親。そんな父親によって、子どもの時に受けた深い傷は、どんなに時間が経っても癒されることはありません。赦さなければとはわかっていても、父親を赦すことができない。多くの男性がそのことで苦しんでいると言います。

今日の箇所、「赦しなさい」とあります。父親のことに限らず、赦せないという思いをどこかで抱いている私たちです。赦すことは簡単なことではありません。いたいどうしたらよいのでしょうか。今日はそのことを見ていきます。

### 1 つまづき (罪)

#### 1) つまづきが起ることは避けられない

1 節でイエスはこう語っています。「つまづきが起るのは避けられない。だが、つまづきを起させる者はわざわいだ。」

前半と後半と二つに分けて、まず最初のほうにある、「つまづきが起ることは避けられない。」これを見ていきます。「つまづく」とは、歩いているときに足に何かがつまづいて、よろめいたり転んだりすることを言います。でも、これでは少しわかりにくい。わかりやすく訳し直すようになります。「罪の誘惑を

避けようとしても、絶対に無理です。」「あなたがたは罪の誘惑から逃れることはできません。」

これは聞きようによって二つのとらえ方ができます。一つは悲観的な反応です。クリスチャンは罪を避け、聖い生活をしなければならないと言われているのに、どんなに努力したとしても無理である。そういう意味になります。これでは、なんの希望もありません。

ところが、ある方にはこれが大きな励ましにも聞こえます。何度も罪から離れようと努力したのにできない、自分はクリスチャンとして失格だと思い込んでいる方がいます。ところが、失敗して当然だったのです。だって、罪の誘惑から逃れることは絶対にできないと言われているからです。これは希望のことばに聞こえます。

いったいどちらの意味なのか。それはまた後で触れていきます。

#### 2) つまづきを起させる者はわざわいだ

後半のことばを見ます。「つまづきを起させる者はわざわいだ。」

皆さんは、こんなことばを自分で言ったり、あるいは人から聞いたりしたことがあるはずです。「私は、あの人をつまづかせてしまった。」「私は、あの人につまづいてしまった。」

もし、自分が本当にほかの人をつまづかせてしまったというのなら、大変なことです。海に投げ込まれることになります。いったい、どう考えたらよいのでしょうか。

冗談半分で言えば、「つまずき」ということばがつまずきになっています。先ほども触れましたが、もう一度繰り返します。聖書で「つまずき」と訳されていることばは、「罪を犯すように誘惑すること」、そのような意味です。しばしば、「だれかをつまずかせてしまった」というような言い方をしますが、ちょっと意味が異なります。普通、悪意があつて相手の人に罪を犯させようとはまずしません。ですから、実際に石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれることはありません。ひとまず安心していただきたいと思います。

## 2 イエス

### 1) 責任を引き受ける

とは言え、なぜイエスはつまずきを与える者に対してこれほどまでに非常に厳しい態度を取っておられるのか、そこが気になります。

このことを考えるために、ひとつの例を挙げます。だれもやりたがらない仕事を、リーダーとして誰かにお願いしなければならないという場合があります。どんなふうにお願いしますか。「〇〇さん。これ、やっておいてください。」とだけ言って、リーダーはさっさと帰ってしまったとします。お願いされたほうはたまりません。「なぜ私がしなければならぬのか」と不満が噴き出します。けれどもリーダーがもしこう言ったならどうでしょうか。「大変申し訳ないけれど、あなたにこれをしていただきたい。もちろんあなたひとりにまかせたりしない。私も手伝います。もし、どんな結果になっても、すべて私が責任をとります。」一緒に手伝ってくれて、その上責任もとってくれる。そこまで言って

くれるのであれば、リーダーに協力しても良いという気持ちになるでしょう。

イエスも同じです。厳しいことを言われるときはいつも、イエスは安全なところに立っているではありません。必ず責任をとる覚悟をされています。自分は関係ないという態度ではありません。自ら先頭を切って火の粉をかぶる覚悟です。もし、小さい者たちのひとりにでも、つまずきが与えられる、言い換えれば罪ある者に定められてしまう、そういうことが起こるといのであれば、それを防ぐためにあらゆることをなさろうとします。いったい何をされたのでしょうか。

### 2) 十字架は避けられない

すでに主ご自身が言っています。「つまずきを起こさせる者はわざわいだ。」もし、つまずきを起こさせる、つまり、人に罪に犯させる者があるなら、その者はわざわいである。のろわれなければならない。いったい誰のことでしょう。

私たちは、この方に何をしましたか。この方を十字架につけました。神である方を十字架に追いやり、殺しました。神の子を十字架で殺すという、これ以上のない罪を犯しました。私たちは、この方につまずいたのです。誰の責任ですか。もちろん、私たちの責任です。けれども、主はこうも言われました。「つまずきが起こるのは避けられない。」私たちがこの方を十字架に追いやり、殺してしまうこと。それは避けられないことであると言っておりました。私たちの責任であるのにもかかわらず、十字架は避けられない出来事であったと受けとめてくださいました。

### 3) のろわれた者となる

みなさんは、もしこの方が私たちのところに来られなかったならと考えたことがあるでしょうか。もし主が来られなかったなら、救いはありません。十字架もありません。主が来てくださったので、救いが与えられました。十字架の出来事が起きました。十字架とはなんですか。私たちが神の子を殺し、罪を犯したところです。私たちは全員そこで罪を犯したのです。私たちは十字架でつまずきました。もちろんそれは私たちの責任です。

ところが主は、なんと言われましたか。「つまずきを起こさせる者はわざわいだ。」

このことばは主ご自身にふりかかっています。意外なことを私は言うかもしれません。でも、主はこう言っているようなのです。「わたしは、あなたがたを十字架でつまずかせてしまいました。そのような者は、石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まなければならない。」

旧約聖書のひとつにヨナ書があります。神から逃れようと、ヨナは船に乗り込むのですが、その船が大きな嵐に遭い、沈みかけてしまいます。船の乗組員は嵐の原因はすべてヨナにあると決めつけ、嵐を鎮めるためにヨナを海のなかに投げ込んでしまいました。ヨナはのろわれた者となったのです。イエスもヨナと同じ道をたどられました。罪のない方であるのに、つまずきを与えた者として十字架でさばきを受けられ、死んでいかれました。

2 節で主が激しいことを言っているのは、ほかでもないご自分のことであつたと気がつきます。

### 3 神の赦し

#### 1) 一日に七度であっても

十字架で罪を赦された私たちは、主の祈り

で、「私たちも私たちに負い目のある人たちを赦しました」と祈るように勧められます。いったい、どれだけ赦せばよいのでしょうか。4 節を読んで誰もが驚きます。「かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」ことわざに、「仏の顔も三度まで」とあつて、赦しの限度は三度までとなっているようです。しかし、キリスト教では、赦しは無限です。何度でもかまわない。まじめな方は怒り出すでしょう。「一日に七度も『悔い改めます』と言って来るような奴は真剣に反省などしていない。口先だけの奴を赦せと言うのか。」信じられないかもしれませんが、たとえ口先だけに見えたとしても、主は赦しなさいと言われます。開いた口がふさがらないとはこのことです。

しかし、開いた口がふさがらないのは私たちではない。神のほうです。自分のことをふり返ってみましょう。何度も罪を犯しました。何度も悔い改めました。けれどもまた同じ罪を繰り返す。神に責められなければならないのは、こちらのほうです。それでも主は赦して下さると言われるのです。

一日に七度人を赦すことは、私にはとうていできそうにもありません。けれども、主はたとえ七度であっても赦して下さると言われます。

#### 2) 赦すことしかできない

こうは言っても、「私の場合は絶対に赦してくれない」、主の赦しを疑う方が必ずいます。その気持ちは理解できます。

けれども、もし主が私たちの罪を赦して下さらないといことがあるなら、いったいどうなるのでしょうか。結論は一つしかありません。

主は、つまずきを与える者となってしまいます。つまずきを与える者はどうなるのですか。石臼を首にゆわえつけられて海に投げ込まれなければならないと言われました。

2 節のことばは私たちにたいへん厳しいことばに聞こえました。けれども実は恵みのことばでした。変な表現でとまどうかもしれませんが、あえてこう言わせていただきます。

「この方は、私たちを無限に赦すことしかできません。」主の十字架の赦しの広さと深さに感謝します。